

「教会と社会」研究会

第22回例会(2009年4月)報告要旨

カロリング期フランク王国における王国集会・教会会議

津田拓郎(東北大学)

本報告の目的は、カロリング期の国王主催の集会の構造と変容過程を解明することである。T. ロイターの「(初期中世において) 政治の分野では、集会や遠征の時以外には時間は止まっていた」(Reuter 2001)との言葉を見るまでもなく、初期中世の王国統治における集会(王国集会・教会会議)の重要性は研究者間の共通認識であると言って良いだろう。しかし現在の初期中世の集会に関する我々の知識は、19世紀から20世紀初頭に行われた制度史的・法制史的研究の段階で止まっている。そこでは、「軍隊集会」、「王国集会」、「貴族集会」、「教会会議」等の概念が用いられ、史料に現れる集会を類型化する試みが行われてきた。中でも「大集会(=正規の王国集会)」と「小集会(=貴族集会)」という2種類の集会の想定は、現在まで強い影響力を維持している(Seyfarth 1910; Goldberg 2006; McKittrick 2008)。しかし近年になって、これらの類型を無批判に想定するのではなく、この時代の王国集会をより柔軟な物として捉える傾向が現れており、伝統的な集会理解は大きな見直しを迫られている。T. ロイターは初期中世の集会に関して、「支配者が出席して、取り巻きの構成員を越えた多くの人々を集めるもの」という以上の定義が困難であるとの立場を取っており(Reuter 2001)、それを受けてさらにS. エアリは、「取り巻き」の定義それ自体も困難であることを指摘する(Airlie 2003)。このような動向を踏まえるのであれば、先行研究で想定されてきた諸類型がどこまで妥当するのかについて、もう一度全面的に問い直す必要があることは明らかだろう。

カロリング期の王国集会を考えるに当たってもう一つ重要な論点は、世俗の王国集会と聖職者による教会会議の関係の問題である。多くの研究者は、集会を指す用語法、集会の参加者、集会で議論される内容における両者の類似性を強調し、カロリング期には聖俗の集会の境界が明確ではなく、王国集会と教会会議が混ざり合っていたとの見解を述べている。ただしこれらの点を強調する論者の中にも、基本的に教会会議と世俗の王国集会を別個の制度と捉え、史料中で両者を見分けることが困難なだけであるとの立場を維持する者たちも少なくない。例えばT. バウアーは、聖俗の参加者が見られる集会を3類型に分類し、俗人の参加者が同意権・決議権を持たないものを「教会会議」、聖俗両方の参加者が同意権・決議権を持つものを「混合教会会議concilia mixta」、それ以外のものを「世俗的集会」として理解する事を試みている(Bauer 1991)。しかしこのような考えは、concilia mixtaと「世俗的集会」をどのようにして区別するのが明示されていない点、「同意権」や「決議権」のような近代的概念を想定している点で問題があるものと思われる。実際バウアー以前から、何人かの研究者が分析概念としてconcilia mixtaを使用してきたものの、その定義は研究者間で

大きく異なっており、カロリング期の集会理解を混乱させてきた。例えば、バウアーは843年のヴェルダン条約以降の西フランク王国において*concilia mixta*が最も多く現れると述べているのに対し、ハルトマンは800年以降には*concilia mixta*は消滅するとの立場を取っている(Hartmann 1989)。そもそも*concilia mixta*なる語は同時代史料には一切現れないものであり、このような分析概念を導入することが、カロリング期の聖俗の集会のあり方を理解する際の助けになるのか、という点から問われるべきであると思われる。

以上のごとき問題関心に照らして本報告では、先行研究が想定していた様々な集会の類型を所与のものとして前提せず、史料に現れる事例を可能な限り網羅した上で、それらの構造や、史料執筆者による叙述のされ方に注目して、同時代の集会理解の解明を試みた。カロリング期全体を対象に分析を行った結果、まず明らかになったのは、先行研究が伝統的に想定してきた「王国集会」、「貴族集会」、「宮廷集会」、「軍隊集会」などの集会の様々な種類の区別は、同時代においては客観的なものとしては存在していなかったということである。叙述史料の執筆者は様々な語で集会を指し示し、一見するとそのような語が集会の類型を示しているかのようにも思われる。しかし、複数の史料が同一の集会をどのように言及しているのかを検討することで、用語法における差異は、史料執筆者の主観に大きく依存しているということが明らかになった。そして、しばしば先行研究において想定された「大集会」(「正規の王国集会」と「小集会」(「貴族集会」)の境界も法的な意味で厳密に確定されていた訳ではなかった。

他方で、これらの集会参加者の叙述史料における描かれ方は、時代を経るにつれて変化している。ピピン期やシャルルマーニュ期前半の史料では、集会の参加者は「フランク人」や「人民」などとして現れていた。それに対しシャルルマーニュ期後半ごろから、「司教、修道院長、伯」といった聖俗の官職担当者が集会の参加者であることを具体的に明示する事例がいくつか現れてくる。また、聖俗の参加者が別々に協議を行っていることが、叙述史料においても明確に言及されるようになってくる。このような構造自体は、ピピン期以来のカピトゥラリアや決議文書中でも認められるものであり、シャルルマーニュ期中頃に集会の構成が大きく変化したというわけではない。変化したのは、参加者や協議に対する叙述史料執筆者の認識なのである。時代が下り高位聖職者の王国統治における位置付けが明確化するにつれて、このような並行協議の果たす役割・存在感がより大きくなったことが、叙述史料中での言及の増加につながっているものと思われる。さらにこのような変化には、司教、修道院長、伯など聖俗の官職担当者がそれぞれの領域で別個の役割を担っているという認識がこの時期高まったことが反映されているとも考えられるだろう。加えて、ルイ敬虔帝期(814~840年)以降、聖職者のみの協議・聖職者のみの集会が、例年記録されている「王国集会」を指す語と明確に区別されてくることも検出された。そして、聖俗の参加者を持つ集会を叙述する際に、あたかも聖職者の集会のみが開かれたかのように描かれる事例すらも現れてくる。さらに、このような「王国集会」の枠組みの中で行われる聖職者の協議以外に、俗人を交えず聖職者のみが独立して集まって協議を行うタイプの集会も徐々に現れてくる。ルイ敬虔帝期まではこのような集会は叙述史料中で言及されることはなかった

が、カロリング期後半以降になると頻繁に叙述史料にも現れるようになり、用語法も例年の「王国集会」とは明確に区別されている。高位聖職者は、他の俗人官職担当者・貴顕とともに王国集会に参集しただけでなく、このような彼らだけの集会をも開催することがあり得たのである。

では、「真の教会会議」と呼ぶに値するような純粋に聖職者のみが集まる集会と、王国集会の枠組みの中で俗人のそれと並行して行われる聖職者のみの協議の間には、何らかの法的な差異が存在したのであろうか。先行研究はしばしば、聖職者が参加しているこの時代の集会に関して、それが「教会会議」と呼ぶに値するかどうかの線引きを試みてきた。しかし、本章の調査結果からは、そのような区別は同時代の史料執筆者においても主観的・相対的なものに過ぎず、「教会会議」と「聖職者が参加しているが教会会議とは呼べない集会」の間に明確な線を引くことが困難であることが明らかになっている。ここでも集会に対する認識は、史料執筆者の主観に大きく依存しており、客観的な聖俗の集会の差異は存在していなかったとあって良い。したがって、先行研究がしばしば想定してきた *concilia mixta* は、同時代の観念に即してみれば完全に不適切なものであり、分析概念としてそれを用いることの有用性も大いに疑われるべきだといって良い。このような知見に即して考えるのであれば、しばしば強調されてきたカロリング後期(特に西フランク以外の地域)における「教会会議活動の衰退」といった言説も、全面的に見直されてしかるべきであろう。何をもって「教会会議」と理解するのかについて、すでに同時代人の間でも多様な見方が存在していたのみならず、聖俗の参加者を集める「王国集会」はカロリング後期に至るまで変わらずに定期的で開催されていたことが明らかにされたからである。本報告の成果を踏まえるならば、同時代の理解と無関係に「王国集会」と「教会会議」を別類型として区分し、片方の類型のみに焦点を当てて研究を行う態度はもはや維持できない。今後行うべきは、従来の教会会議研究(又は王国集会研究)において検討の対象外とされてきた集会をも射程に含めた上で、そこで具体的にどのような事が議論されたのか、それらの集会が国制においてどのような役割を果たしていたのかを明らかにすることである。

参考文献目録

史料

- J. D. Mansi (ed.), *Sacrorum Conciliorum Nova Amplissima Collectio XII*, Florenz, 1766
Idem (ed.), *Sacrorum Conciliorum Nova Amplissima Collectio XVII*, Florenz, 1772
Idem (ed.), *Sacrorum Conciliorum Nova Amplissima Collectio XVIII*, Florenz, 1773
J. P. Migne (ed.), *Patrologia Latina. 125. Hincmari Rhemensis archiepiscopi opera omnia, juxta editionem Sirmondianam ad prelum revocata*. Paris, 1852
R. Rau (ed.), *Quellen zur karolingischen Reichsgeschichte I*, Darmstadt, 1968
Idem (ed.), *Quellen zur karolingischen Reichsgeschichte II*, Darmstadt, 1969
Idem (ed.), *Quellen zur karolingischen Reichsgeschichte III*, Darmstadt, 1969

Monumenta Germaniae Historica

- A. Boretius (ed.), *Capitula regum Francorum I*, Hannover, 1883
A. Boretius and V. Krause (eds.), *Capitularia regum Francorum II*, Hannover, 1897
G. Schmitz (ed.), *Die Kapitulariensammlung des Ansegis*, Hannover, 1996

A. Werminghoff (ed.), *Concilia II, Concilia aevi Karolini 1 und 2*, Hannover – Leipzig, 1906-1908
W. Hartmann (ed.), *Concilia III, Die Konzilien der karolingischen Teilreiche 843-859*, Hannover, 1984
Idem (ed.), *Concilia IV, Die Konzilien der karolingischen Teilreiche 860-874*, Hannover, 1998

G. H. Pertz (ed.), *Scriptorum I*, Hannover, 1826
Idem (ed.), *Scriptorum II*, Hannover, 1829
J. M. Lappenberg (ed.), *Scriptorum XVI*, Hannover, 1859

F. Kurze (ed.), *Annales regni Francorum, Scriptores rerum Germanicarum in usum scholarum separatim editi 6*, Hannover, 1889
B. von Simson (ed.), *Annales mettensis priores, Scriptores rerum Germanicarum in usum scholarum separatim editi 10*, Hannover, 1905

T. Gross and R. Schieffer (eds.), *Hincmarus De ordine palatii. Fontes iuris germanici antiqui in usum scholarum separatim editi III*, Hannover, 1980

E. Mühlbacher (ed.), *Die Urkunden der Karolinger I. Die Urkunden Pippins, Karlmanns und Karls des Großen*, Hannover, 1906

F. Lošek (ed.), *Die Conversio Bagoariorum et Carantanorum und der Brief des Erzbischofs Theotmar von Salzburg*, Hannover, 1997

エインハルドゥス・ノトケルス、國原吉之助(訳・註)、『カロルス大帝伝』筑摩書房、1988年

研究書・研究論文(欧文)

S. Airlie, 'Talking Heads: Assemblies in Early Medieval Germany', in P. S. Barnwell and M. Mostert (eds.), *Political Assemblies in the Earlier Middle Ages*, Turnhout, 2003, pp. 29-46

S. Airlie, W. Pohl and H. Reimitz (eds.) *Staat im frühen Mittelalter*, Wien, 2006

T. Bauer, 'Kontinuität und Wandel synodaler Praxis nach der Reichsteilung von Verdun', *Annuaire de l'histoire des conciles* 23, 1991

B. Bigott, *Ludwig der Deutsche und die Reichskirche im Ostfränkischen Reich (826-876)*, Husum, 2002

J. F. Böhmer and E. Mühlbacher (eds.), *Regesta Imperii I. Karolinger: Regesten 751-918(924)*, Innsbruck, 1908

E. Boshof, *Ludwig der Fromme*, Darmstadt, 1996

W. Brown, *Unjust Seizure: Conflict, Interest, and Authority in an Early Medieval Society*, Ithaca, 2001

T. M. Buck, *Admonitio und Praedicatio: Zur religiös-pastoralen Dimension von Kapitularien und kapitulariennahen Texten (507-814)*, Frankfurt am Main, 1997

A. Bühler, 'Capitularia Relecta: Studien zur Entstehung und Überlieferung der Kapitularien Karls des Großen und Ludwigs des Frommen', *Archiv für Diplomatik Schriftgeschichte, Sigel- und Wappenkunde* 32, 1986, pp. 305-501

G. Bühler-Thierry, *Evêques et pouvoir dans le royaume de Germanie. Les Eglises de Bavière et de Souabe, 876 – 973*, Paris, 1997

J. Chélini, *L'aube du moyen age: Naissance de la chrétienté occidentale*, Paris, 1991

R. Collins, 'The Reviser Revisited: Another Look at the Alternative Version of the *Annales Regni Francorum*', A. C. Murray (ed.), *After Rome's Fall: Narrators and Sources of Early Medieval History*, Toronto, 1998, pp. 191-213

P. Depreux, 'Ambitions et limites des réformes culturelles à l'époque carolingienne', *Revue historique* 307-3, 2002, pp. 721-753

R. Deutinger, *Königsherrschaft im Ostfränkischen Reich. Eine pragmatische Verfassungsgeschichte der späten Karolingerzeit*, Ostfildern, 2006

D. Eichler, *Fränkische Reichsversammlungen unter Ludwig dem Frommen*, Hannover, 2007

I. Fees (ed.), *Die Regesten des Westfrankenreiches und Aquitaniens. I Karl der kahle 840(823)-877. Lfg. 1(840/823-848)*, Köln – Weimar – Eivn, 2006.

J. Fried, 'Der karolingische Herrschaftsverband im 9. Jh. zwischen "Kirche" und "Königshaus"', *Historische Zeitschrift* 235, 1982, pp. 1-43

- Idem, 'Gens und Regnum. Wahrnehmungs- und Deutungskategorien politischen Wandels im früheren-Mittelalter. Bemerkungen zur doppelten Theoriebindung des Historikers', J. Miethke and K. Schreiner (eds.), *Sozialer Wandel im Mittelalter. Wahrnehmungsformen, Erklärungsmuster, Regelungsmechanismen*, Sigmaringen, 1994, pp. 73-104
- F. L. Ganshof, *Was waren die Kapitularien?*, Weimar, 1961
- F. L. Ganshof (transl. by J. Sondheimer), *The Carolingians and the Frankish monarchy*, London, 1971
- M. T. Gibson and J. Nelson (eds.), *Charles the Bald: court and kingdom*, Aldershot, 1990
- P. Godman and R. Collins (eds.), *Charlemagne's Heir: New Perspectives on the Reign of Louis the Pious*, Oxford, 1990
- H.W. Goetz, 'Regnum: Zum politischen Denken der Karolingerzeit', *Zeitschrift der Savigny-Stiftung für Rechtsgeschichte, Germanistische Abteilung* 104, 1987, pp. 110-189
- J. E. Goldberg, *Struggle for Empire: kingship and conflict under Louis the German. 817-876*, New York, 2006
- J. M. Wallace-Hadrill, *The Frankish Church*, New York, 1983
- W. Hartmann, 'Zu einigen Problemen der karolingischen Konzilsgeschichte', *Annuario historiae conciliorum* 9, 1977, pp. 6-28
- Idem, 'Laien auf Synoden der Karolingerzeit', *Annuario historiae conciliorum* 10, 1978, pp. 249-269
- Idem, *Die Synoden der Karolingerzeit im Frankenreich und in Italien*, Paderborn – München – Wien – Zürich, 1989
- Idem., *Ludwig der Deutsche*, Darmstadt, 2002
- Idem (ed.), *Ludwig der Deutsche und seine Zeit*, Darmstadt, 2004
- Idem (ed.), *Recht und Gericht in Kirche und Welt um 900*, Oldenbourg, 2007
- W. Hechberger, *Adel im fränkisch-deutschen Mittelalter. Zur Anatomie eines Forschungsproblems*, Ostfildern, 2005
- J. Imbert, *Les temps carolingiens. I, L'église: Les institutions*, Paris, 1994
- Idem, *Les temps carolingiens. II, L'église: La vie des fidèles*, Paris, 1996
- M. Innes, *Introduction to early medieval western europe, 300-900. The sword, the plough and the book*, London and New York, 2007
- P. D. King, *Charlemagne*, Lancaster, 1987
- W. Levison and H. Löwe (eds.), *Deutschlands Geschichtsquellen im Mittelalter. Vorzeit und Karolinger I*, Weimar, 1952
- Idem (eds.), *Deutschlands Geschichtsquellen im Mittelalter. Vorzeit und Karolinger II*, Weimar, 1953
- Idem (eds.), *Deutschlands Geschichtsquellen im Mittelalter. Vorzeit und Karolinger III*, Weimar, 1957
- Idem (eds.), *Deutschlands Geschichtsquellen im Mittelalter. Vorzeit und Karolinger IV*, Weimar, 1963
- Idem (eds.), *Deutschlands Geschichtsquellen im Mittelalter. Vorzeit und Karolinger V*, Weimar, 1973
- Idem (eds.), *Deutschlands Geschichtsquellen im Mittelalter. Vorzeit und Karolinger VI*, Weimar, 1990
- A. Lhotsky, *Quellenkunde zur mittelalterlichen Geschichte Österreichs*, Wien, 1963

- S. MacLean, *Kingship and Politics in the Late Ninth Century: Charles the Fat and the End of the Carolingian Empire*, Cambridge, 2003
- R. McKitterick, *The Frankish Church and the Carolingian Reforms. 789-895*, London, 1977
- Eadem, *The Frankish kingdoms under the Carolingians*, London & New York, 1983
- Eadem, 'Zur Herstellung von Kapitularien: Die Arbeit des Leges-Skriptoriums', *Mitteilungen des Instituts für Österreichische Geschichtsforschung 101*, 1993
- Eadem (ed.), *CAROLINGIAN CULTURE: emulation and innovation*, Cambridge, 1994
- Eadem, *Charlemagne. The Formation of a European Identity*, Cambridge – New York – Melbourne – Madrid – Cape Town – Singapore – São Paulo – Delhi, 2008
- H. Mordek, *Bibliotheca capitularium regum Francorum manuscripta. Überlieferung und Traditionszusammenhang der fränkischen Herrschererlasse (MGH. Hilfsmittel 15)*, München, 1995
- Idem, *Studien zur fränkischen Herrschergesetzgebung. Aufsätze über Kapitularien und Kapitulariensammlungen ausgewählt zum 60. Geburtstag*, Frankfurt am Main – Berlin – Bern – Bruxelles – New York – Oxford – Wien, 2000
- Idem, 'Art. Kapitularien', *Lexikon des Mittelalters V*, München - Zürich, 1991, pp. 943-946
- J. Nelson, *Politics and Ritual in Early Medieval Europa*, London, 1986
- Eadem, *The Annales of St-Bertin*, Manchester and New York, 1991
- Eadem, *Charles the Bald*, London, 1992
- Eadem, *The Frankish World 750-900*, London and Rio Grande, 1996
- Eadem, 'The voice of Charlemagne', R. Gameson and H. Leyser (eds.), *Belief and culture in the middle ages*, Oxford – New York, 2001, pp. 76-88
- R. Pokorny, 'Ein unbekannter Synodalsermo Arnos von Salzburg', *Deutsches Archiv für Erforschung des Mittelalters 39*, 1983, pp.379-394
- Idem, 'Eine Brief-Instruktion aus dem Hofkreis Karls des Großen an einen geistlichen Missus', *Deutsches Archiv für Erforschung des Mittelalters 52-1*, 1996
- C. Pössel, 'Authors and recipients of Carolingian capitularies. 779-829', R. Crradini, R. Meens, C. Pössel and P. Shaw (eds.), *Texts and Identities in the early middle ages*, Wien, 2006, pp. 253-274
- K. Reindel, 'Bayerische Synoden im 8. Jahrhundert', *Bayern vom Stamm zum Staat*, München, 2002, pp. 1-18
- T. Reuter, 'The "Imperial Church System" of the Ottonian and Salian Rulers: A Reconsideration', *Journal of Ecclesiastical History 33*, 1982, pp. 347-374
- Idem, *Germany in the early Middle Ages 800-1056*, London and New York, 1991
- Idem, *The Annals of Fulda*, Manchester and New York, 1992
- Idem, 'Assembly Politics in Western Europe', P. Linehan and J. L. Nelson (eds.), *The Medieval World*, London, 2001, pp. 432-450

- D. Rollason, 'The Royal Palace in the Early Middle Ages: Representation and Reality of Power', 『西洋史研究』新輯第37号
- R. Schieffer, 'Karolingische und ottonische Kirchenpolitik', D. Bauer, R. Hiestand, B. Kasten and S. Lorenz (eds.), *Mönchtum – Kirche – Herrschaft 750-1000*, Sigmaringen 1998, pp. 311-325
- Idem, 'Karl der Große und die Einsetzung der Bischöfe im Frankenreich', *Deutsches Archiv für Erforschung des Mittelalters* 63-2, 1997, pp. 451-467
- R. Schneider, 'Zur rechtlichen Bedeutung der Kapitularientexte', *Deutsches Archiv für Erforschung des Mittelalters* 23, 1967, pp. 273-294
- E. Seyfarth, *Fränkische Reichsversammlungen unter Karl dem Großen und Ludwig dem Frommen*, Leipzig, 1910
- J. Story (ed.), *Charlemagne. Empire and society*, Manchester and New York, 2005
- H. Weber, *Die Reichsversammlungen im ostfränkischen Reich. 840-918. Eine entwicklungsgeschichtliche Untersuchung vom karolingischen Großreich zum deutschen Reich*, Würzburg, 1962
- K. F. Werner, 'Die Nachkommen Karls des Großen bis um das Jahr 1000', W. Braunsfels (ed.), *Karl der Große: Lebenswerk und Nachleben IV*, Düsseldorf, 1967, pp. 403-479
- H. Zielinski (ed.), *Die Regesten des Regnum Italiae und der burgundischen Regna, I*, Köln – Weimar – Wien, 1991

研究書・研究論文(邦語)

- 五十嵐修「フランク時代の王権・教会・平和」、『史観』132、1995年、pp. 47-61
- 同「『王国』・『教会』・『帝国』——9世紀フランク王国の『国家』をめぐる——」、『東洋英和女学院大学人文・社会科学論集』23、2006年、pp. 1-52
- 大久保泰甫「カピトゥラリアの法的性格」1-4、『法学協会雑誌』第81号-4、pp. 309-372；第85号-5、pp. 701-737；第85号-11、pp. 1503-1546；第85号-12、pp. 1617-1674(1965-8年)
- 加納修「メロヴィング期にカピトゥラリアはあったのか——フランク時代の国王命令と文書類——」、『歴史学研究』795、2004年、pp. 32-43
- 河井田研朗「カロルス大帝の『万民への訓諭勅令』(Admonitio Generalis)(七八九年)の試訳」、『ノートルダム清心女子大学キリスト教文化研究所年報』第27号、2005年、pp. 117-150
- 同「カロルス大帝の『万民への訓諭勅令』(Admonitio Generalis)(七八九年)の注解(1)」、『福岡大学人文論叢』第36号-4、2005年、pp. 1-23
- 佐藤彰一・早川良弥編著『西欧中世史』上、ミネルヴァ書房、1995年
- 津田拓郎「カロリング期教会改革のバイエルンにおける展開——ザルツブルク大司教アルノ(785[798]-821)の時代を中心に——」、『西洋史研究』新輯第34号、pp. 77-109
- 同「ルートヴィヒドイツ人王時代における集会の果たす役割について」、『歴史』第110輯、2008年、pp. 1-25
- 山田欣吾『教会から国家へ——古相のヨーロッパ——』創文社、1992年